

Kappa Novels



この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「カッパの本」ではどんな本を読まれたでしょうか。このつきには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽二の十二の十三

光文社

神吉晴夫

連作推理小説 近松検事シリーズ ^{さいご}最後の自白

昭和42年7月5日 初版発行

検印廃止 ￥310

著者	^{たか} 高 ^ぎ 木 ^{あき} 彬 ^{みつ} 光
	東京都渋谷区本町1-8
発行者	神吉晴夫
印刷者	堀内文治郎
	東京都千代田区三崎町2-18-11
	堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Akimitu Takagi 1967



光文社の「カッパ・ノベルス」誕生のことは

カッパ・ブックス Kappa Books の姉妹シリーズが生まれた。カッパ・ブックスは書下ろしのノン・フィクション（非小説）を主体としたが、カッパ・ノベルス Kappa Novels は、その名のごとく長編小説を主体として出版される。

もともとノベルとは、ニューとか、ニューズと語源を同じくしている。新しいもの、新奇なもの、はやりもの、つまりは、新しい事実の物語というところから出ている。今日われわれが生活している時代の「詩と真実」を描き出す——そういう長編小説を編集していきたい。これがカッパ・ノベルスの念願である。

したがって、小説のジャンルは、一方に片寄らず、日本的風土の上に生まれた、いろいろの傾向、さまざまな種類を包蔵したものでありたい。かくて、カッパ・ノベルスは、文学を一部の愛好家だけのものから開放して、より広く、より多くの同時代人に愛され、親しまれるものとなるように努力したい。読み終えて、人それぞれに「ああ、おもしろかった」と感じられれば、私どもの喜び、これにすぎるものはない。

昭和三十四年十二月二十五日

制作刊行者

神吉晴夫

連作推理小説

さいご じ はく
最後の自白

たか ぎ あき みつ
高木彬光

近松検事シリーズ



カッパ・ノベルス

目次

パイプの首 5

影の男 57

愛と死のたわむれ 89

かまきりの情熱 121

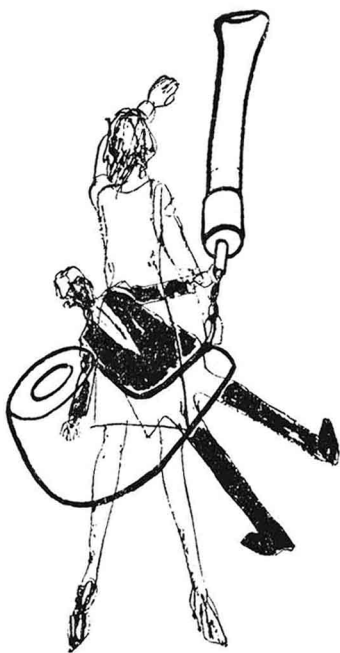
消えた死体 167

最後の自白 213

本文のイラスト

山野辺
進

パイプの首



激しい雨が、夜の六甲^{ろっこう}ドライブウエーに降りそそいでいた。

視界はおよそ百メートルぐらいしかない。スピードをおとして、安全運転を続けているのだが、前を走っている車もない。

「帰ったら、熱いやつを一杯ひっかけるかね。今度の事件では、きみにもだいぶ苦勞をかけたからな」

車の中の橋本卓三^{はしもとたくざう}警部は、吸いさしの煙草を灰皿におしこむと、隣りにすわっている岸田^{きだ}刑事に話しかけた。現在捜査中の事件も、いよいよ大詰めだった。犯人はすでに逮捕され、裏づけ捜査も順調に進んでいる。これから六甲山ホテルへ行って、ある証人に会えば、事件は完全に終止符を打てるわけだった。

「結構ですな。むこうのほうは、手とり早くかたをつけてしましましょうや」

岸田刑事も、元氣をとりもどしたような声で答えると、運転席の警官にむかって、

「きみ、運転は慎重にたのんだぜ。この道でへたにスリップでもしたら……」

刑事はとたんに声をのんだ。橋本警部もはっとして、車の外を見つめたが、そのときヘッドライトの中には、道ばたにとまっている一台の大型車の後部が浮かび上がった。

「事故かな？」

警部がつぶやいたとき、この車は前の車のそばを通りすぎた。車窓が雨に濡^ぬれていたので、むこうの様子はよくわからなかった。

「テール・ランプも車内灯もついていませんでしたね。エンコにしても、意識的なものじゃありませんか？」

岸田刑事はにやりと笑って言った。

「車の中でも、外とおなじように、しっばり濡れているというわけかね？」

「車の中での色ごとも、なかなかおつなものらしいですよ。ことに外車の場合には、それほど窮屈でもなさそうですし——まあ、あんまり無粋なまねをしてもかわいいうですから、ほっておいたほうがいいですよ」

たしかに車の主が外へ出てどこかを修理しているよう

な様子もなかったし、警部たちがこのとき、たいした疑惑を感じなかったのも当然だったろう。

それからほぼ一時間後――

六甲山ホテルから帰途についた二人は、問題の車が、まだもとの場所に止まったままなのを発見した。

「ストップ！」

橋本警部は、その車の直前で運転手に声をかけると、岸田刑事にむかって、

「きみ、これはいくらなんでも、ちょっと度がすぎやしないかね？」

といった。

「そうですね……こういう雨の山道で、テール・ランプもつけずに、いつまでも駐車しておくのは、ほかの車が事故をおこす原因になりかねませんし……ひとつ注意してやりましょう」

岸田刑事は、車をその外車のそばに横づけさせ、窓ガラスを開けて呼びかけた。

「おい、きみたち！」

返事はなかった。

岸田刑事は、懐中電灯をとり出すと、この外車の中を

照らして見て眉をひそめた。

「誰も乗っていませんよ……それに、車のキーもさしまれたままです。妙ですね」

刑事は車からおりて、外車のドアの取っ手に手をかけた。ドアはそのまま、すっと開いた。

「こんな上等な車を、鍵もかけずにほうり出しておくとは、どんな神経でしょう？」

岸田刑事は、ぶつぶつひとりごとを言いながら、外車の運転席にもぐりこみ、エンジンをかけた。それからアクセルをふみこんで、二十メートルばかり走らせ、それからバックでもとの位置までもどって来た。

「べつに故障もしないようです……これは、どういうわけでしょう？」

「うむ……これが街の中なら、車を盗んで、そのまま乗り捨てたということもあるだろうがねえ」

橋本警部も首をひねった。

「こんなところで、車を乗りすてる馬鹿はいないでしょう。街まで歩けば、たっぷり二時間はかかるんじゃないですか？ しかも、この雨の中ですからね」

「どうもくさいな」

橋本警部もひくくつぶやいて車をおりた。懐中電灯で付近を照らしまわって見たが、人の気配はまったくない。道路の東側は、切りたつた岩肌が雨に濡れている。西側は、急な斜面が下へ、闇の中へ沈みこんでいた。懐中電灯の光では、その底のほうまではわからなかった。「この雨で、しかも夜ではしようがないな」

橋本警部は、あきらめたようにつぶやいた。警察官魂の権化のような彼はこのとき、犯罪の臭気というようなものを感じていたのだが、この場では、これ以上のことはできなかったのだ。

「とにかく帰って車の持ち主を調べることだな。朝になれば、あるいは死体が見つかるかもしれん」
「たしかにそんな予感がしますね」

二人はこんな話をしながら車へ帰った。車はあらためて、夜の山道を走り出したが、警部の心は雨の闇より暗かった。

「車ごと、ガードレールをのりこえて、谷へ落ちたというのなら、ごくありふれた事故ですがね」

刑事も重い口調で話しかけてきた。

「僕もそう思っていたんだが……」

橋本警部は、新しい煙草に火をつけて、

「車の主が、小便でもするつもりで、車をおり、崖から足をふみはずして落ちたとも思えないね。それにしては、車のエンジンを切ってあったのが解せないよ」

「そうです。それに小便ぐらいなら、わざわざ雨の中を崖っぷちまで歩いて行かなくても、車のドアを開けただけで用がたせますよ。こんな山の中では、誰も見ているわけではないんですし」

「そうなると、これはやっぱり殺しかな？ いっしょに乗っていたやつが突きおとしたか、ただ、それにしても、雨の中を崖っぷちまで誘い出すのは厄介だな」

「あるいは、死体をここまで運んで来て、崖下へ捨てたのかもしれないね」

「でも、そうなると、犯人がなぜ、あの車をそのままにしておいたかという疑問が残るよ……犯人はこの雨の中を、街までの長い道のりを、酔狂にも、てくてく歩いて行ったというのかね？」

「犯人のほうは、車の運転ができなかったんじゃないか」

「それは、たしかに単純明快な答えだがね」

橋本警部は、顎をなでまわしながら、考えこんでしまった。

県警本部へ帰って来ると、警部はすぐに車の持ち主の調査を命じた。フォード・ギャラクシーという車種と、車のナンバーから、持ち主はすぐにわかった。フランス人のマルセル・ベシュウ——神戸市内にあるベシュウ商会の常務だったが、この夜は、これ以上の手はどうにも打ちようがなかった。

2

マルセル・ベシュウの死体が発見されたのは、その翌朝のことだった。

橋本警部の漠然たる予想どおり、自動車の乗り捨てられていた地点の崖下、約二十メートルの岩の上に転落していたのである。

死体の顔はめっちゃめっちゃに潰れ、全身には無数の打撲傷が残っていた。身長一メートル八十、髪の色は栗色で、眼の色は青、三十六歳の美男子だったということだが、この死体からは、生前の面影は察することもできな

かった。

死体の発見された地点からは、血痕もほとんど発見されなかった。雨のために、完全に洗い流されてしまったのだろう。車のあったあたりにも、もちろん足跡などは見つからなかった。

泥まみれになってはいたが、洋服は上物のフラノの背広で、神戸でも一流の洋服屋のラベルがついていた。紙入れ、時計、ライターなど、所持品はすべてそのままで、物盗りの犯行でないことは明らかだった。時計は、針がふっとんでしまっていて、死亡推定時刻の割り出しには、ぜんぜん役に立たなかった。

自宅のほうへ連絡をとると、間もなく、彼の妻のアンが、商會社長のアンリ・ベシュウといっしょにかけつけて来た。アンのほうは、日本語は不得手らしかったが、アンリ・ベシュウは、長年日本に住んでいるということ、日本語もべらべらだった。通訳を介してのもどかしい会話の手間が省けたので、橋本警部も内心ほっとしたのだった。

警部は二人に死体の確認を求めたが、アンのほうはとたんに「オー・ノン！」と叫んで気絶してしまった。外

人の女は、どうして何かといえはすぐに気絶するのだろうかと、警部は内心、舌打ちしたくなるような思いだった。

髪の毛の色も体つきも、故人にそっくりなアンリ・ベシュウは、青ざめた顔で死体をしばらく見つめていたが、やがて十字を切って重々しくうなずいた。

「間違いありません。たしかに弟のマルセルです……」

警部はアンを警察医にまかせて、アンリを取調べ室へ案内した。

「さっそくですが、ひととおり事情をお聞かせねがいたいのです。弟さんも、日本には長くおいでだったのですか？」

「いや……弟が日本へ来たのは、一年ちょっと前でした。それまでは、ずっとニューヨークに住んでいたのです」

「それで、弟さんは、ニューヨークではどんなお仕事になさっていたのです？」

「やはり商売をやっていたのですが、あんまりうまくいなくて……それで、私がこちらへ呼びよせたのです」

「なるほど……それで、弟さんはあの奥さんと、アメリカで結婚なさったのですか？」

「そうです」

「それで、弟さんといっしょに、こちらへ来られたのですね？」

「弟のほうで、三カ月ばかり先に来ました。彼女はこちらへ来るのを、あまり喜んでいなかったようです」

アンリは、かすかに眉をひそめて言った。

「おたくの会社の業務内容をお話してくださいませんか」

「ごくありふれた貿易会社ですよ。主としてヨーロッパから、高級衣料品、化粧品、食料品、薬品などを輸入して、国内の業者に流すのです。日本の特産品を、むこうへ輸出する業務もやっていますが、これはあまり多くはありません。日本の大きな商社におさえられているものですから……」

「機械類などはあつかっておられないのですか？」

「ほとんどやっておりません。そういうものは、どうしても大どころに太刀^{たち}打ちできませんから……」

「商会の創立者は、もちろん、あなたなのでしょうね？」

「それは、そうだとも言えますし、そうでないとも言えますね。私の父が、この神戸でベシュウ商會を開いたの

は、大正年間のことですが、第二次世界大戦が始まったので商売もできなくなったのです。フランスがナチス・ドイツに侵略されてから間もなく、私たちはアメリカへわたり、そこで終戦を迎えました。それから、ちょっとフランスへ帰っている間に、父も死にましたが、私はまた、父の遺志を継ぐために、なつかしい日本へもどって来たのです。ですから、正式に言いますと、ベシュウ商会は二代目だということになりますね」

「なるほど……それでは、あなたも弟さんも日本育ちというわけですね」

「私のほうはそのとおりです。しかし、弟のほうは、前に日本にいたときは、ほんの子どもでしたから」

「はじめ、弟さんはあなたとこちらで、いっしょに仕事をするお気持ちにはなかったのですか」

「それは……」

アンリはちょっと苦い顔をして、

「弟は、アメリカにいるあいだに、すっかり物質文明の虜^{とりこ}となってしまうのです。いわゆるアメリカナイズというやつですね。父が死んでから、弟は伝手^{つて}を求めて、ニューヨークへ渡りました。マルセルはフランス人とい

うよりも、アメリカ人だったのですよ。私はフランス人というよりも、日本人なのかもしれませんね……私の第二の故郷はこの神戸の街です。三年前に亡くなった妻も、この外人墓地で永遠に眠っています」

アンリは感傷的な表情で、ポケットからとり出したピースに火をつけた。橋本警部も一息ついて質問を続けた。

「今度の事件は、どうもただの事故とは考えられないような気がするのですが、何か思いあたる節はありになりませんか？」

「つまり——弟には敵がいた、その敵に殺されたのだとお考えなのですか？」

アンリは当惑しきったような表情で、

「決して、かくすわけではありませんが、その点は、私にはなんともお答えできません……マルセルは派手好きで、かなりの発展家でしたから、女性関係のトラブルはひょっとしたら、あったかもしれません」

「それでは、奥さんとの間も、あんまりうまくいっていなかったのですか？」

「さあ、それは……夫婦の間の機微^{きび}というのは、兄弟

の仲でも、なかなかわからないところがありますからね」

アンリは、言葉を濁してしまった。

「誰か——弟さんと関係があったと思われるような、特定の女性についてのお心あたりはおありですか？」

「いいえ、私はただ、そういう印象をうけただけで、具体的事実を知っているわけではないのですよ」

「でも、弟さんは、こちらへ来てまだ一年ちょっと——というお話でしたが、それだったら交際範囲はかなり限定されるのではないのでしょうか？」

「そうとばかりは言えないと思います。何しろ、弟はすっかりヤンキー^{ヤンキー}氣質^{かたぎ}が身についていて、誰とでもすぐにつきあいはじめる始末でしたから……」

「それで、弟さんは日本語はお上手^{じょうず}でしたか」

「日常の用事をたすには十分でした。細かな言いまわしになると怪しいものでしたが……やはり、子どものころにおぼえていた言葉ですから、ぼつりぼつりと思ひ出したのでしようね。今度、日本へやって来たときには、ほとんど記憶に残っていなかったようですが……」

「それでは、日本人とのつきあいもあったのですね」

「もちろんです。私の会社の社員も、大半は日本人なのですから」

「念のためにうかがいたいのですが、弟さんが自殺したということは考えられないのでしょうか？」

「自殺？」

アンリは一瞬、奇妙な表情を浮かべた。

「まさか……弟が自殺しなければならなかったような、切羽^{きりう}つまった事情は考えられませんよ。だいいち、マルセルは自殺するようなタイプではありませんよ。自殺するくらいなら、むしろ……」

アンリは急に口ごもると、大きく首を横にふった。

「自殺ということは、絶対に考えられませんね。私たちが一家はカソリック教徒です。ご承知のように、カソリックでは、自殺は神さまに対する叛逆^{はんぎ}ということになっていきます……」

「それでは別のことをおたずねしますが、昨夜の弟さんの行動について、おわかりになっていることをお話しください」

「五時ごろ、私より一足先に会社を出たことは知っていますが、それ以後のことはぜんぜんわかりません。いま

ここへ来る途中、アンにも聞いてみたのですが、昨夜は彼が帰って来なかったので、早くから酒を飲んで寝てしまったというのです。何しろ、気性の強い女ですから、よくヒステリーをおこすのですよ」

「それで、弟さんは会社から、フォード・ギャラクシーに乗って帰って行かれたのですね」

「ええ、あの車も、弟の趣味でしてね」

アンリはまた眉をひそめて言った。よくよくアメリカ嫌いなのだろう。

「ところで、あなたも車はお持ちでしょう？」

「私の車ですか？ 私は日本のセドリックを愛用していますよ。アメリカの車は、けばけばしい感じがして好きになれません。それに図体ばかり大きくて、ガソリンばかり食って、日本で使うのにはふむきですよ」

3

それから橋本警部は、この事件と本格的に取っ組みはじめた。マルセルの死体はすぐに解剖され、間もなく、詳細な報告書ができてきた。

それによると、死因は激しい衝撃による頭蓋骨折だった。首の骨にもひびがはいっていた。顔から全身にかけての傷も、いちおう岩に激突してきたものと推定されたが、その中に、鈍器による打撲傷がまじっていないとは言いきれないということだった。いずれにせよ、彼が何者かと争った形跡があるかどうかは、死体の状況からは、なんとも断定できかねたのである……。

死亡推定時刻は午後九時前後——橋本警部たちが、現場を最初に通りがかったのが十時ごろだったから、それから約一時間ほど前ということになる。

また、彼はピフテキを主とした食事をとっていて、それから約二時間後に死亡したことも判明した。だから、食事をした時間がわかれば、死亡推定時刻のほうも、またいちだんと正確なものになってくるはずだった。

被害者の胃からは、ピフテキのほか、少量のアルコールも検出されたが、死んだときに泥酔していたとは考えられなかった。食事のときに、かるく一杯ひっかけた程度だったろう。なお、毒物のたぐいはぜんぜん検出されなかった。

橋本警部は、この報告を聞く前から、殺人事件として